

「他なるもの」と出会い、 自分を開く



石井洋二郎
東京大学理事・副学長

聞き手
森山至貴
(社会学者、作曲家)

大人になり直すとは？

森山：災害や事件などの痛ましいニュースが絶えない今だからこそ、他者とかかわりや、芸術のもつ力について再認識したい…今回のインタビューはそこを出発点としています。石井先生はフランス文学がご専門ですが、大学では教養学部の授業もおもちですね。その授業をまとめた『大人になるためのリベラルアーツ』を拝読して、「他者とどう出会うのか」「どうすれば新たに他者と出会っていける人でいられるのか」という問いが常に底流にあるのではと感じました。まず先生のお考えになる「教養」や「他者」についてお聞かせください。

石井：教養学部長になったときに「教養」についてあらためて本気

で考えることになりましたが、それまでは一般的な定義として「いろいろなことを幅広く知っていること」くらいにしか思っていませんでした。しかし、ただ幅広い知識をもっているだけではあまり意味がない。それでは単なる物知りにすぎない。特に専門性を背景にしない教養教育というのは、どうしても退屈になってしまいます。私自身も経験がありますが、〇〇概論のような授業は自分の軸が



石井洋二郎・藤垣裕子

『大人になるためのリベラルアーツ
思考演習12題』（東京大学出版会、2016）

「飢えた子どもを前に文学は役に立つか」「真理は1つか」「絶対に人を殺してはいけないか」などの演習課題について、学生と教師の意見交換の様子をまとめた本。専門分野や価値観の異なる他者との対話によって、大人になるための思考を鍛える。

ないと全然関心に触れてこないのです。それならば1・2年生よりもむしろ3・4年生の、自分が何をしようかと本気で考え始めたところで、別の視点から自分の専門を相対化するような授業をしたほうがいいのではないかと。自分と同じ専門の仲間ではなく、全くそのことを知らない人間に語る言葉をもてるようにする授業が必要なのではないか……そう思って、この授業をしてみようかと考えました。

森山：学部の3・4年生ではまだ何かのエキスパートというレベルではないけれど、その段階で必要だということですね。

石井：学部を卒業して就職する学生は、社会に出ればいろいろな他者と触れる機会が多いでしょうから、そのための訓練という意味があります。一方、大学院に進んで研究者になる場合、特に理系では研究室に入ってしまうと、自分と同じ専門の先生や学生と話す機会が増え、他が見えなくなってしまう。自分たちの中だけで通用するような言葉に慣れてしまうと、一歩外に出たとき全く



○ いい・ようじろう

1951年、東京都生まれ。1975年、東京大学法学部卒業。1978年、パリ第4大学修士課程修了。1980年、東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了。1980年、東京大学教養学部助手。1982年、京都大学教養部助教授。1987年、東京大学教養学部助教授。1994年、同教授。2007年、東京大学駒場図書館長。2012年、東京大学副学長。2013年、東京大学大学院総合文化研究科長・教養学部長。2015年より東京大学理事・副学長。学術博士。

主要著書

『差異と欲望—ブルデュー「ディスタンクシオン」を読む』(藤原書店、1993)
『ロートレアモン イジドル・デュカス全集』(訳、筑摩書房、2001、日本翻訳出版文化賞・日仏翻訳文学賞)
『ロートレアモン 越境と創造』(筑摩書房、2008、芸術選奨文部科学大臣賞)
『フランスの思考—野生の思考者たちの系譜』(中公新書、2010)
『告白的読書論』(中公文庫、2013)



説明できない。それではやはり困ります。

森山：そうですね。

石井：「リベラルアーツ」と「教養教育」はごっちゃにされていますが、本来リベラルアーツで重要なのは「限界からの解放」という概念です。「限界」にもいろいろありますが、ここでは専門性や分野に閉じこもってしまう、そういう限界を指しています。だからそれを乗り越えるためのリベラルアーツは、専門を掘り下げるほど必要性が増すのだと私は考えています。

森山：それぞれがエキスパートになっていく中で教養が必要ということなのですね。

石井：そのとおりです。

森山：この本も「大人になるため」とありますが、自分が大人だと思っている人こそ触れなければいけないということでもありますね。

石井：「大人になるための」と付けたのは、学生対象の授業内容を本にしたことにもよりますが、まさに今おっしゃったように「大人だと“思っている”人たちはほんとうに大人なのだろうか？」という問いを提起したかったからでもあります。一般的に、いろいろな経験を積んで物分かりがよくなり、むやみに波風を立てないのが大人になることだと言われていますけれど、そうではありません。むしろ現状に安住して、他者と触れ合うことで自分を変えていく習慣を失っているような大人たちこそ、もう一度大人になり直していく必要があるのではないかと……つまり「大人になり直すためのリベラルアーツ」ともいえます。

森山：大人たちは「エキスパート」化されてはいるけれど、他なるものに対して開かれていないことが多いということでしょうか？

石井：異質なものに触れる機会というのはどのような社会でもあると思いますので、一概には言えませんが、これはその人の自覚や生き方の問題であり、違うものに触れても、自分が開かれていなければ意味がありません。そういったことへの問題提起でもあります。

いろいろなことを経験する

森山：「エキスパート」化の道に乗り出していない小学生、中学生、高校生にとっても、他なるものとの出会いは必要ですね。

石井：そうですね。小・中学生、あるいは高校生という時期は、い

ろいろなことを勉強して世の中を知り、自分を固めていく段階ですから、まずは誰にとっても共通の基本的な知識を身に付けなければなりません。それとは別に、手当たり次第に本を読むことも大事です。読書についてはおそらく「この年齢でこの本を読めばよい」ということはなくて、私はもうひたすら読めばいいと思います。音楽もそうですね。ひたすら聴かなければ出会いも生まれないのではないのでしょうか。自分に何が合っているのかは読んでみないと分からないし、聴いてみないと分からない。だからまずは量をこなして、その中から自分に向いているものを考え始めるのが大学に入る頃だと思います。

森山: 読書以外ではどのような経験が必要だと思われますか？

石井: あらゆる経験が身になると思うので、音楽も絵画も当然必要でしょうね。また、いろいろなところへ行く、違う場所を見るというのも大事です。両親や先生以外の大人に触れることも。とにかく、今、自分がいる環境とは違うところに身を置いてみる経験を若いうちからできるだけしたほうがいいと思います。その機会は大人が与えないと、なかなか自分でできることではありませんが。

森山: 中学校や高等学校の部活動はほんとうは「他なるもの」に出会えるチャンネルのはずなのに、それが学校の中にあることでそうならないように最近感じます。地元のサッカークラブでサッカーをしている子と、中学校の部活動でサッカーをしている子では、見ている世界が全然違う…。もしかすると、今の中・高生は「他」と触れる機会を潤沢に与えられていないのかもしれないと思うときがあります。

石井: なるほど。学校という枠による限界ですね。

森山: その限界に対して、読書は居ながらにしてどこへでも行ける。他の経験と比べても、ある種希有でおもしろいものです。

石井: 私の最初の読書経験も、冒険小説でした。自分のいる世界とは全く違うところにどこへでも飛んでいける、その魅力にまず惹かれて本を読み始める。多くの人はきっとそうだと思います。居な



○ もりやま・のりたか

1982年生まれ。東京大学教養学部卒業、同大学院修士課程修了。同博士課程満期退学。日本学術振興会特別研究員(PD)。東京大学大学院総合文化研究科国際社会科学専攻助教を経て、早稲田大学文学学術院専任講師。専門社会調査士。第22回朝日作曲賞受賞。第13・18・20回朝日作曲賞佳作受賞。大学院生時代には東京大学コーロ・ソーノ合唱団の学生ピアニストとして松本望氏の合唱組曲『むすぶれるものたち』の初演に携わった。

主要作品

『混声合唱とピアノのための さよなら、ロレンス』(音楽之友社、第22回朝日作曲賞受賞)

混声合唱組曲『蝶 はばたく朝』(教育芸術社)

『女声合唱とピアノのための おてんきのうた?』(Miela Harmonija)

混声合唱組曲『太陽と海と季節が』(BRAIN MUSIC)

がらにして異文化も経験できるし、外国のものも読める。そういった導入のためにも読書は大事なんじゃないかな。

森山: 私自身の学生時代を思い出しても、図書室が居場所だったというか…本を読むのは楽しいですね。ほんとうにつくづくそう思います。

石井: 中・高生ぐらいの頃はどんな本を読んでおられましたか？

森山: 日本のミステリーを読んでいましたが、小学生の頃はルパンやホームズに夢中でした。

石井: 私も推理小説が大好きなんですよ。

森山: 先生はどのようなものを読まれますか？

石井: 私も日本のものが好きで、現代作家では島田荘司、古いところでは横溝正史など。江戸川乱歩も小さいときから読んでいました。

森山: 横溝正史や江戸川乱歩は、大人に隠れて自分の好きな世界が広がっていく典型的な最初の入り口ですね。

石井: 禁断の扉ですね(笑)。



毒によって崩れる体験

森山：本のもつ、ある種の「毒」についてもぜひ伺いたいのですが。

石井：以前『毒書案内』という変な本を書きましたが、毒の効用は教養ともかわります。教養はいろいろなものを読んで知識を増やす足し算の世界です。それはそれで必要ですが、自分の人格を固める一方で、崩すことも大事だと思っています。引き算、あるいは割り算の世界ですね。

森山：はい。

石井：固まってしまうと定型的な思考しかできなくなるし、感性も硬直してしまう。意外なものに出会うことによって自分が開かれる瞬間が私は大好きです。自分が予想もしないものに遭遇してしまう…それは本でも映画でも音楽でも何でもいいのですが、そういうものとの出会いで、今まで固めてきたものが崩れてしまうような感覚をどこかで大事にしないと、生きていてもつまらないだろうと単純に思うのです。自分がどこかで崩れて、またつくり直す。絶えず更新していくことが生きていくことの意味ではないかと。その意味で読書というのは、何かを学ぶ、ためになるということだけではなく、「こんなものが世の中にあったのか!」と衝撃を受け、愕然としてしまうような経験が大事で、私自身そういう本に出会うことで成長してきたと思います。崩そうと思って崩れるものではないので、これはもう偶然まかせになってしまうのですが、だからこそ若い人はいろいろなものに触れることが必要だと思います。

森山：「毒」や「積み上げたものが崩れていく快楽」というのは、教養の「裏側」というより、教養にとって“不可欠な要素”ということでしょうか。

石井：そうですね、教養というよりはリベラルアーツと言うべきなのかもしれません。固まってしまった自分から自分をリベレートす

る (liberate 自由にする、解放する) ということです。

森山：私が今日、ぜひお話したいと思っていたのが『毒書案内』でも取り上げられている『眼球譚』¹ のことです。僕は学生に「学生のうちに『眼球譚』をぜひ読んでほしい」と言っています。学校の授業ではどうしても積んでいくことが主になりますが、そうやって一生懸命積み上げたものはこの1冊で全部崩れてしまう。だから崩れたという体験も一緒に持ち帰ってほしい、とにかく『眼球譚』を読んでから卒業しなさいって。

石井：そんな先生めったにいないよね(笑)。

森山：ほんとうにすーっと崩れてしまうんですね。それに会えるのは教室の中の授業ではないので、「体験してみたら」と教師が唆^{そそ}すことも大切だと思っています。

石井：あの本に出会ったときの衝撃は…。当時、中学生ぐらいで性的な興味がつのっているときに、古本屋でちょっと怪しげな本が置いてあるところに行って、他の本と一緒にさりげなく買い、作者が誰かなど知らないまま親に隠れて読み、あまりの衝撃に腰が抜けるような思いをしました。その経験はいまだに忘れられません。でもそれがなければ、自分は今このような仕事をしていなかったと思うほどの衝撃でした。

森山：ということは、『眼球譚』は今、先生の中に積まれているものを積み上げるための、最初の一撃だったのでしょうか。

石井：そうですね。私はバランスのとれた人間だと思われているらしく、『眼球譚』の話をするたびびっくりされます。でもお堅い本ばかりを読んできたわけではありませんし、そういう秘密めいたものへの関心は誰にだってきっとあるはずです。後から振り返ってみると、私の人格の一部は確実にこれによってつくられたと思います。幅が広がったとも言えます。こういうものがあることを知っているから、そうでないものに関心をもつのだし、そうやって往復していくことが大事で、一種類のものだけを追いかけても、結局薄っぺらなものにしかならないと思います。

森山：積み上げ巧^{こうし}者は壊し巧者みたいな(笑)。積み上げて専門家としてすばらしい功績を上げる人は、上手に自分で自分を壊すことができたり、自分を壊す何かに対するアンテナを張っていたり、そういう出会いを大切にできるところがあるのでしょうか。

石井：上手に壊すというよりも、いやおうなく壊れてしまうという感じでしょうか。望んだわけでもないのに、何かが突然暴力的にやってきて、自分が信じていたものが土台からガラガラと壊れてしまう。ただ、そういうものに開かれていないと、おそらく壊れることもないでしょう。開かれていない人がああいうものを読んでも、「何だこれは」で終わってしまうと思います。学生に『眼球譚』を薦めて、どのような反応がありましたか？

森山：いちばん言われるのが「これ読んでいいんですか?」。「うん、読みなよ」と返しますが。

石井：なるほど。

¹ 1928年にオーシュ卿の名義で地下出版されたジョルジュ・バタイユ(1897～1962)の小説。バタイユはニーチェから強く影響を受けた哲学者、思想家、作家。『眼球譚』では、主人公の「私」がガールフレンドとともに繰り広げるアブノーマルな行為について描かれている。

森山：アンテナを張っていない学生に一押ししてあげるのが教師としての役目だと思います。

石井：万人受けする本ではありませんからね。

積み上げ、壊し、跳躍する

森山：その他に、先生にとって決定的な壊れる体験はありますか？

石井：「壊れる」のとは少し違いますが、影響を受けたのはニーチェです。高校のある時期、哲学書ばかり読んでいたのですが、高校生ぐらいでカントやハイデガーを読んだところで分かるわけがない。とにかく周りの友人に負けじと読みましたが、さっぱり分からなくて「俺はばかなんじゃないか」と思っていたときに、ニーチェの『ツァラトゥストラ』を読んだら、これはストレートに入ってきましたね。頭で何かが分かるという以前に、体に言葉が突き刺さってくるという感じで、とにかくかっこよくてしびれてしまいました。論理的に何かを理解するのは、全く違った本の読み方がある。あれは哲学書と言われているが、私に言わせればほとんど詩のような作品で、それに感応できるかどうかはもはや感性の問題です。ですから「ニーチェが何を言っているか」ではないんですよ。「かっこいい」と思って共感共振するというのかな…何か一緒にふるえてしまうようにあの本を読みました。非常に大きい経験でした。

森山：壊れるのとはまた違う…そこに立っているものに触れてしまうような経験でしょうか。

石井：そうかもしれませんね。飛躍してしまう、跳躍してしまうという感じでしょうか。

森山：跳躍って、伝えるのが難しいと感じるときがあります。音楽でもそうですが、例えば一つの学問領域の根幹にある重要な発想は、ジャンプして捕まえにいかなくてはならないものだという気がします。

石井：確かにそうです。学問は、どんな学問でも積み上げがなくてはいいませんが、大きな業績を上げる人は、最後にどこかでポンと跳躍します。先日、ノーベル賞を受賞された梶田隆章先生と対談する機会がありました。理系は蓄積を踏まえなくては何もできないので、実験データを膨大に積み上げるわけですが、それでもあるところから直感(直観)のようなものがあって、そこで跳ぶことで学問が発展するのだとおっしゃっていました。文系では、理系ほど蓄積が意味をもたないかもしれませんが、やはり過去の人たちが書いてきたものをいろいろ読んで、そこから跳躍するところにおもしろさがある点は同じです。芸術も同じという気がします。

森山：積み上げることと、壊すことと、跳躍することが常に行ったり来たりしながら、何らかの業績を上げる。もっと広く言うと、それが大人になっていくということなのかもしれませんね。



インタビューを終えて 森山至貴

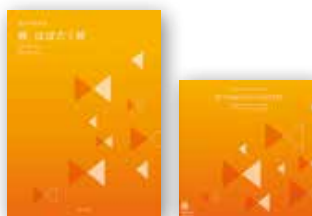
他者と出会うことで自己の中に知識や経験が蓄積されていき、また他者に出会うことでそれらが突き崩される…石井先生のお話から浮かび上がる教養の姿は、とてもダイナミックな動きを持ったものでした。膨大な読書遍歴を含め、一ところに留まることを知らない石井先生の圧倒的な知性はこのダイナミズムに裏打ちされているのだな、と強く感じました。

次号掲載のインタビュー後半では、石井先生と音楽の意外な関わりが明らかになります。どうぞお楽しみに。

弊社発行の森山至貴合唱組曲！

混声合唱組曲『蝶 はばたく朝』

- 成本和子 作詞 / 森山至貴 作曲
 - 「蝶 はばたく朝」「はっぱのなかのみち」「桃ひとつのひらに」「水鳥のうた」
 - 定価(本体1,500円+消費税) / A4変型判 / 56ページ
- 準拠CD
- 定価(本体1,800円+消費税) / 1 枚



授業者に 訊く—1

小学校は、埼玉県所沢市を訪れました。4年生の音楽づくりの授業では、子どもたちが終始生き生きとグループ学習に取り組んでいました。今回の聞き手は、小学校・中学校ともに作曲家で聖徳大学准教授の松井孝夫先生です。

授業者：松長 誠（所沢市立小手指小学校）



本時の授業の位置付け

本時の課題は、一人一人がつくった旋律をグループでつなげ、まとまりのある音楽をつくることです。日頃から授業の導入において即興的な表現活動を積極的に取り入れ、音楽づくりの学習経験を補ってきました。本授業で扱う「レ・ミ・ソ・ラ・シ」などの五音音階は、お囃子の旋律づくりの学習活動で扱われることが多いのですが、今回は、音の濁りが少ないという五音音階の特性を生かし、伴奏に循環コードを用いた提案的な旋律づくりの授業を展開します。

また、本校では、日頃からICT機器を活用し、教師がピアノ伴奏やオーディオ機器の操作から離れ、児童との対話や助言の機会を増やせるよう、指導の工夫を図っています。



戸村達男 先生
所沢市立小手指小学校校長

授業の流れ

	○ 学習の内容 ・ 学習活動	● 指導上の留意点 ☆ 評価
導入	○ 即興表現活動をする。 ・ タンブリンを用いたリズム応答。 ・ ミニグロッケンを用いたコールアンドレスポンスアドリブリレー。 ○ 学習の見通しをもつ。 ・ 既習事項を振り返る。 ・ 本題材における学習目標や学習計画を知る。	● 伴奏のテンポや調性を変え、活動に変化をつける。 ● 積極的に即興表現をしようとしている児童や、休符や音に気を付けて表現している児童の学習意欲を称賛する。 ● 音のしりとりに反復など、つなぎ方に気を付けた旋律づくりや、リズムリレーなどの既習事項を振り返り、本時の活動につなげる。
展開	○ 本時の学習の目当てや学習の進め方を確認する。 グループでせんりつをつなげてお題の続きをつくろう。 ○ 旋律づくりを進める。 ・ 演奏順序や階名を書き込む記録ボードを用意し、各グループで補助的に活用する。 ○ 中間発表をする。 ・ 各グループの発表を聞き合う。 ○ 旋律づくりを深める。 ・ リズムや旋律のつなぎ方について、思いをもってもう一度旋律づくりに取り組み、スムーズに演奏できるよう練習する。	● 前時までに、4つの主題(お題)から自分が好きな旋律を選び、それを元に、グループ分けをしておく。 ● 各グループを巡回し、児童の思いや意図を引き出すようにする。 ● リズムや旋律にこだわっているグループや個人を取り上げて発表する。 ☆ 自分の思いや意図をもち、他者と音楽を共有しながら積極的に表現活動に取り組んでいる。
まとめ	○ つくった音楽を発表する。 ・ 発表を通して、思いや意図を聴き手に伝える。 ・ 他のグループの発表を聴いて、それぞれのよさに気付く。	● 本時の学習活動における音楽的な価値の高まりを称賛し、次時の学習意欲につなげる。 ● 記録ボードや演奏を録画したものを、振り返りや評価の際に生かすようにする。 ☆ リズムや音を適切に組み合わせて旋律をつくり、拍の流れのにりながら演奏している。

子どもの思いや意図を引き出す、 教師の力とは

聞き手：松井孝夫（聖徳大学）

ICT機器の活用

松井：授業中、先生が一人一人の子どもの表情を見ながらアドバイスをしている姿が印象的でした。授業の際、意識されていることはありますか？



○まつなが・まこと
所沢市立小手指小学校教諭

松長：2つあります。一つは子どもたち全員に声掛けをする時間を捻出するために、ICT機器を使うことです。ピアノに付きっきりになってしまうと子どもたちを見ることが難しいので、いつも首にミュージックプレイヤーを掛けBluetoothで接続し音源を流せるようにしています。教室のどこにいても操作できるので、机間巡視の時間が増えます。今日の授業ではピアノを1回も弾きませんでした。もちろん曲の仕上げのときにはピアノを使いますし、生演奏は大切なので、ないがしろにしているわけではありません。ただ、子どもをよく見るためには取捨選択が必要だと思います。もう一つは、頭の中に子どもたちの情報をインプットし、一人一人に「どう？」と声を掛けられるようにしていることです。これまでに築いてきた子どもたちとの信頼関係を大事にしています。

松井：子どもたちとの距離が近いと感じました。板書しながらでは机間巡視はできませんので、ICT機器の活用があってこそできることです。そういう意味で画期的な授業だったと思います。

松長：これは必須ですよ！ICT機器を使うことは目的ではなく手段ですが、子どもとの距離が縮まりますし、授業を効率よく進めることができます。今日の授業では音楽の活動量がだいたい80%ぐらいあったと思います。どうしても思考・判断や話し合いに多く時間を取られてしまうので、音を出している時間とのバランスが課題なのですが、活動量が今日ぐらいあれば充実した授業だったといえると思います。

松井：数値に表して検証しているというのがすばらしいですね。

松長：前任校では小学校の学級担任でしたが、体育の授業で活動量について指導を受けたことが音楽にも生かされているところがあります。音楽の授業も、活動量が大事なのではないかと考え、いつも確認するようにしています。

松井：ICT機器を駆使しているのを拝見して、これからの新しい扉を開いていく授業だと感じました。子どもたちと効率よく接することができていましたし、活動する時間もたっぷりありました。

5つの音で旋律づくり

松井：今回の授業では、「レ・ミ・ソ・ラ・シ」の5音で旋律をつくる活動を行いました。4年生の教科書には民謡音階に基づく「ミ・ソ・ラ・ド・レ」を用いた「5つの音で、おはやしのせんりつをつくりましょう。」と

いう教材が載っています。

松長：お雛子の音楽や日本の伝統的な音楽を学校でももっと取り上げるべきだと思いますが、まずはそうした枠にとらわれず、子どもたちがふだん聴き慣れている機能利和声を用いて音楽づくりを進めてみようと思いました。

松井：「レ・ミ・ソ・ラ・シ」の音板だけを取り付けたミニグロッケンを使っていましたね。

松長：この五音音階とC-D-G-Gというコード進行の伴奏とが、どの音を選んでもびったり合うことを発見し、これは授業で使えるだろうと思いました。



○まつい・たかお
1961年12月5日東京生まれ。東京学芸大学音楽科作曲専修卒業、同大学院教育学研究科修了。東京都の公立中学校教諭を経て、1993年より東京学芸大学附属大泉中学校、同附属国際中等教育学校に勤務。2010年4月より、聖徳大学音楽学部音楽総合学科准教授。

教員を始めた頃から、地域のボランティア活動に参加していたことがきっかけで歌づくりをするようになる。小・中学生のために書かれた合唱曲は全国各地で歌われ、多くの子どもたちや指導者から共感と支持を得ている。また、作曲を通じた創作（音楽づくり）分野でのワークショップも評価が高い。主な作品に、「松井孝夫ベストセレクション」シリーズ（教育芸術社）、同CD（フォンテック）、星野富弘の詩による混声合唱組曲『悲しみの意味』（教育芸術社）他。

松井：伴奏の音源は、先生がつくられたのですか？

松長：GarageBandというアプリを使って自分でつくりました。テンポや調性をその場で変えたり、3拍子にしたりすることもできます。ICTの力ですね。

松井：デジタル教科書などの教材にこういった音素材が入っていると、便利でしょうね。

松長：多くの先生は、教材の伴奏音源をつくるのにたいへん苦労されているので、こういった教材があれば助かると思います。メトロノームのように、ただ拍を刻むだけではなくて、リズムにのれるようないろいろなジャンルの伴奏を選べるようになるといいですね。子どもたちの意欲も高まりますし、アクティブ・ラーニングにもつながります。

思いや意図をもってつくること

松井：音楽づくりについては、「思いや意図をもって」と学習指導要領にも示されていますが、何かネックになっていることはありますか？

松長：音楽づくりは、パズルのように音を組み合わせれば容易にできる反面、そこに思いや意図があまり反映されていないように思います。これは危惧しなければならないことです。子どもの思いや意図をどのように引き出すかが課題であり、私もどうやってそれをくみ取ればよいのかが分からなかったのが、即興活動から始めてみようと思いました。そのほうが子どもたちはリズムや旋律にいろいろな価値観を見いだすことができると思ったのです。

松井：音楽づくりがパズルのようにになってしまうのは、適当に組み合わせても音楽として成り立ってしまうのが原因だと思っています。今日も11グループ中7グループが「音のしりとり」でつくっていました。

松長：これまでに学んだ旋律のパターンを3つ例示したのですが、その中で「しりとりは簡単で楽しい」と考えるグループが多かったのだと思います。

松井：その他には、強弱を工夫していたり、最後をソで終わらずにミで終わったりするグループがあり、いろいろな捉え方がみられました。途中であるグループのところに集まって中間発表をしていましたね。

松長：書くことから入っているグループが多かったのですが、あのグループは音を試しながらつくっていたので選びました。

松井：その後は、どのグループも音を試しながら活動していたので、この中間発表はよかったと思いました。

松長：音楽づくりにおいて書きながら考えることはとても大切ですが、音を出す時間が減ってしまい、思いや意図があまりなくても作品が仕上がってしまうのがデメリットです。学習指導要領の中でも、A表現(3)アの「いろいろな音の響きやその組合せを楽しみ、様々な発想をもって即興的に表現すること。」という部分が特に小学生にとっては重要と考えているので、やはり音から入ってほしいという思いがあります。また、最後に発表した別のグループも音を出しながら考えており、シンコペーションを含んだ細かいリズムを使っていました。

松井：リレーやコールアンドレスポンスもあったので、おもしろかったですね。

松長：工夫した点をこのグループの子どもたちに質問してみたところ、「最初と最後を一緒にした」「休符を使った」など、思いや意図をもって音楽づくりができていたの





で、日頃の授業の成果かなとうれしくなりました。

松井：そういった意図をもっているか否かで作品に音楽性が出てきますよね。このグループの作品は音楽的価値が高いと思いました。

音楽づくりと〔共通事項〕

松長：音楽づくりでは、題名や物語からイメージを膨らませ、それらを音にするという形の「標題音楽」をつくる教材が少なく思っています。

松井：標題は、子どもたちの思いや意図という部分で思考のヒントになることもあります。ただよい面と悪い面があり、イメージすることは大事ですが、それが単なるこじつけにすぎないという考え方もあると思います。

松長：そのような教材が少なくなった背景として、単なる効果音づくりになってしまったという危惧もあったと思います。確かにそのとおりで、「旋律が上がった」「音色や速度が変わった」と感受できる子どもを育てなければいけません。そのためのキーワードは〔共通事項〕です。一方で、雰囲気やイメージから生まれる音楽もあります。その両者をつなぐために、例えばだんだん迫る感じを出すためにクレシェンドしてトレモロを使ったり、リズムや強弱を工夫したりするなど、思いや意図と〔共通事項〕を結び付ければ、音楽づくりの活動が効果音で終わってしまうことはないと思います。

松井：そうですね。昔のわらべ歌が「○○ちゃん、○○ちゃん、遊びましょう」「はあ



い」という会話から生まれているように、音楽は生活に根ざして生まれるのだと思います。「おはよう」「ありがとう」といったふだんの会話を音にしてみるなど、身近なものを一つの手段として音楽づくりにつなげていけるといいですね。

松長：教科書に「言葉でリズムアンサンブル」という教材があります。授業では、4文字の「おまつり」という言葉を6文字の言葉に変えたり、テンポやリズムを変えたりするなど工夫して実践していますが、1つの単語でリズム、問いと答え、反復に気を付けてつくるといった活動が会話的ではないせいか、子どもたちの“ノリ”があまりよくありません。そうした場合、対になる言葉を使うなど、教師自らが教材を工夫することで、よりよい授業づくりを目指していきたいものです。

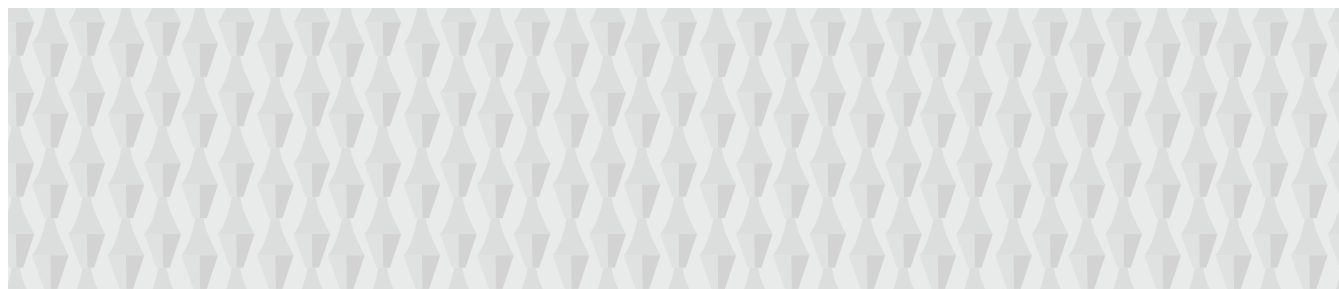
音楽づくりのよさを広めたい

松井：今回授業をして、子どもたちの感想はどうでしたか？

松長：単純に「音楽づくりは楽しい？」と聞いたら「楽しい！」と答えていました。これまでの授業は作品を仕上げることに主眼が置かれていましたが、子どもたちは自由に音楽を楽しみたいのでしょう。私たち教師が多くの引き出しをもち、子どもたちの自由な発想の中で音楽的な価値を高め、深い学びに結び付けることができるよう、音楽づくりの研究を進めていく必要があると思います。

松井：教師が実践や研究を行える場をもっと増やしていかなければなりませんね。

松長：歌唱・器楽・音楽づくり・鑑賞のバランスは、現状では〔4：4：1：1〕ぐらいではないでしょうか。これを〔3：3：2：2〕ぐらいの割合にしたいものです。歌唱や器楽は学校行事ともかかわっているので多くなりますが、「いい演奏をして終わり」では



いけないと思います。

松井：音楽づくりの指導のときに、手ごたえを感じたり子どもの輝きをキャッチしたりするのはどのような場面ですか？

松長：小学生はよく、音を鳴らしている瞬間に楽しそうな表情をします。完成したから楽しいという場合と、完成しなくても試行錯誤しているときに楽しいという場合があります。

松井：経験の差がどうしても出てしまうので「音楽なんてつukれない」と言う子もいますが、何とか形にすることができて、「あよかった」と安心した子どもの顔を見ると、うれしくなりますね。

松長：そもそも音楽づくりに興味をもてない子もいます。なぜ歌わなければいけないのかと思っている子に歌わせるよりも、なぜつukらなければいけないのかと思っている子に音楽づくりをさせるほうが難しいです。歌いたい、楽器を演奏したいと思う子はたくさんいますが、「音楽をつukりたい」

という思いを広めていくのは音楽科の教師としていちばん苦労しているところです。

松井：音楽づくりの苦手な先生でも音楽づくりの指導に取り組めるようにしていくには、どのようなことが必要だと思いますか？

松長：日本の音楽教育の根幹には表現至上主義があります。時間をかけた割にあまりよい作品がつukれないのならば、技能の向上する曲をきちんと演奏できるようにしたほうがよいのでは、という声を聞きますが、音楽づくりでは、音楽が生まれる過程で一度はぐちゃぐちゃになることを経験するのも大事だと思います。今日の授業では、完成しなかったり全然まとまらなかったりしたグループもありました。ここで、教師の教材研究力、指導力、見取り力が重要になると思います。私は、子どものつukった作品について「こういう方法もあるよ」と提案はしますが、方法を強要したり、作品を否定したりすることは決してありません。出来上がった作品がどうであれ、作

品の音楽的な価値はもちろん、その子の音楽づくりとのかかわり方でよかったところを必ず探して、肯定的な言葉を掛けるようにしています。そして、最後まで完成させることで子どもたちは達成感や充足感を得られると思いますので、教師がどのぐらい支援して、子どもたちの思いや意図を引き出すかが重要です。支援しすぎるのもだめですし、しなさすぎるのもだめなので、そのさじ加減が難しいところです。

松井：音楽が生まれる過程を大事にする指導をしていきたいですね。いろいろな試みのある授業でしたので、ぜひ多くの方に紹介したいと思います。

松長：今後も新たな提案をしていけるよう、さらに努力していきます。



授業者に 訊く—2

中学校は、鑑賞教材の定番『魔王』の授業を参観しに、群馬県伊勢崎市を訪ねました。和気あいあいと活動しながらも、鑑賞時には集中力高く聴く1年生の生徒たち。『魔王』を歌う先生への素直なまなざしが印象的な授業でした。

授業者：石田浩紀（伊勢崎市立第三中学校）



本時の授業の位置付け

本時は3時間扱いのうちの第2時です。各登場人物のグループに分かれて音楽と詩のかかわりについて意見をまとめ、最終的にクラス全体で、自分たちのイメージする『魔王』を構成し、味わうことを目標とします。各人物の心情の変化を手がかりにしながら、生徒たちが音楽の特徴や表現をより深く捉えることができるように授業を進めます。



下田 仁 先生
伊勢崎市立第三中学校校長

授業の流れ

	○ 学習の内容 ・ 学習活動	● 指導上の留意点 ☆ 評価
導入	○ リトミック活動を行う。 ○ 既習曲を合唱する。	● 集中力を高め、楽しい雰囲気や表現しやすい環境をつくる。
展開	○ 『魔王』の各登場人物の音楽的構成を考える。 ・ 付箋に自分の意見を書く。 ・ 語り手、父、子、魔王のグループに分かれて話し合う。 ・ 大切な言葉、強調したい事柄、ドイツ語の発音など、捉えた心情を音楽的要素と関連付けて考えられるよう、黒板に明示する。 ○ 各登場人物の音楽的特徴をクラスで共有し、全体の構造を考える。 ・ クラス全体でどのように表現したらよいかをまとめ、拡大楽譜に記入する。 ○ クラスで創り上げた『魔王』を鑑賞する。（教師がクラスで共有したイメージをもとに歌う。）	● 話し合いがスムーズに行えるよう、グループ分けに注意する。 ● 歌詞をもとに心情の変化を捉え、表現について考えるため、グループでの朗読なども試すよう促す。 ● 話し合いがスムーズに行えない班には「速度」「強弱」「役柄を生かす音色」の変化に注目させる。 ☆ クラス全体で『魔王』のイメージを共有することができたか。（観察・発言・ワークシート） ● 伴奏は事前に録音したものを使用する。
まとめ	○ 感想を発表し合う。 ○ ジェシー・ノーマンの演奏を鑑賞する。	● 楽曲と向き合う時間を十分確保する。 ● クラスで共有したイメージと音楽的諸要素とを関連付けて考えるようにする。 ● 互いの着目点のよさを共有できるようにする。 ☆ クラスで創り上げたイメージの特徴を実際の演奏から聴き取ることができたか。（観察・発言・ワークシート）

いろいろな表現や感じ方があっていい

聞き手：松井孝夫（聖徳大学）

同声で歌う

松井：すばらしい授業でした。『魔王』は「どのように聴き取るか」を入口にすることが多いと思いますが、今日は「自分たちの『魔王』をつくろう」という画期的な授業でしたね。子どもたちがプロデュースした内容をもとに先生ご自身が歌うという、石田先生にしかできない授業は圧巻でした。

石田：ありがとうございます。

松井：まず導入について伺います。最初のウォーミングアップは5分にも満たない時間でしたが、肩たたきから手打ち遊び、既習曲とテンポよく進みました。既習曲では先生が女声と同じ高さで歌って指導していらっしゃるのに驚きました。

石田：行事があると音楽の授業はほとんどつぶれます。ですから1時間の中で、短時間で効果のあることを考えます。生徒も疲れてくると活動のスイッチが入らなくなるので、大事な主題からそれることはほとんど削いでこのスタイルになりました。同声で歌の練習を始めると、変声した生徒の裏声の練習にもなるんです。

松井：あれだけ高い声で歌うのは超人的



です。発声の指導はどうかしていますか？

石田：なにせ時間が足りないので、歌いながら気になったところを取り出して練習します。前任校ではお昼休み合唱団のようなものもつくってました。

松井：校歌もよく歌っていましたね。とても素直に、腹の底から声が出ていました。

石田：ちょっとしたことだと思うのです。アドヴァイス一つであったり、裏声で女声と同じ高さで歌うようにしたり。私もうまく歌えませんが、試行錯誤して一緒に歌い、「背中の後ろを伸ばすようにして歌うよ」「先生だったらこのときこうするな」と声を掛けるようにしています。

松井：子どもたちは先生を見て、すぐにまねて声を出していましたね。身をもって指導するとすぐに伝わるのだと感じました。

生徒の声は先生に似てくると言いますが、先生が多彩な声を出せるのでうらやましく思いました。歌唱の授業も見たいです！

表現に近い能動的な鑑賞

松井：授業では、語り手、父、子、魔王のグループに分かれ、各登場人物の大切な言葉や音楽的な要素について考え、自分たちの『魔王』のイメージを発表しました。学習のプロセスとして思考・判断・表現がありますが、今日は知覚・感受・分析・表現という新しいプロセスを見たような気がしました。各自の意見をグループにもちよって、グループでどのように歌うのかをまとめて拡大楽譜に書き込む…その中で子どもたちはすでに表現者になっていたと



〇いしだ・こうき
伊勢崎市立第三中学校教諭



思います。あのグループはどのような分け方だったのでしょうか？ 語り手と父が1班ずつ、子と魔王が2班ずつでした。

石田：生活班の6班をそのまま当てはめ、希望を聞いて好きな人物を選びました。

松井：最初に各自が付箋に自分の意見を書きますね。

石田：何も考えないままグループへいってしまう子もいますし、グループ内で何もしない子もいますので、まずは参加してもらいます。

松井：各グループが意見を発表しているときに、要所要所でドイツ語を取り上げていらいしゃいました。知的好奇心をくすぐります。復唱しても geschwind の“d”の「トゥ」が言えなくて「ツ」や「チュ」となったり(笑)。

石田：おもしろがってまねていました。リートのドイツ語の語感や言葉さばきは難しいですが、切っても切り離せないものなので、1つでも2つでも表現の仕方が分かれば日本語の合唱にもつながると思うんです。

松井：そうですね。



石田：ドイツ語が目的ではありませんが、演奏会などに行って「この言葉、知ってる!」と思ったり、その言葉がどのような感情で歌われるのかを知ったりすることは興味深いものです。言葉があって音楽があるわけですから、そこは大事にしたいと思います。

松井：まさに表現に近い鑑賞ですね。子どもの視線で曲を捉えていてすばらしい。このような能動的な鑑賞指導に至るまでには、どのような紆余曲折があったのでしょうか？

石田：自分がなぜ多くの演奏会に行くのか、自分が聴いて楽しい演奏は何かと考えると、「こういうことがしたくて、こういう演奏をしている」という内容が分かることだと思い至りました。子どもたちに「これがいいから聴きなさい」とただ与えるだけでは、自分から聴こうと思わないのではないのか。「自分だったらこうしたい」と子どもなりに少しでも考えるようになれば、立証して確かめるという聴き方ができると思いました。それが始まりです。

松井：大学で学生に模擬授業をさせますが、やっぱり鑑賞の授業は講釈ばかりで知識を披露する授業になってしまいがちです。そんなときにちょっと歌ってみると、曲が自分のものになって聴くときの深まりになり、いろいろな表現があることに気付く一歩になるのかもしれない。これからは鑑賞といっても受け身ではなく、能動的な表現を意識した授業が必要だとあらためて思いました。

石田：高校時代、先輩がバッハの『マタイ受難曲』のCDと楽譜を貸してくれましたが、そのときは「マタイ」に全く興味がな



○ まつい・たかお
聖徳大学音楽学部音楽総合学科准教授

かったので、1週間借りたのに何も聴かずに返してしまいました。

松井：(笑)。

石田：音楽が好きな人でも興味がなければ聴こうとしないのだから、子どもならなおさらですね。それを「これはいい曲だから」と言って、もしかしてその子がその曲に出会うことはこれからないかもしれないのに、無理に押し付けてしまったらかわいそうかなと思って。

生徒プロデュース 『魔王』を歌う

松井：先生のあのすばらしい歌声を、子どもたちは何回も聴いているのですか？

石田：ソロで歌うのは初めてです。

松井：意外と冷静に聴いていましたね。もっとエキサイトするかと…。出だしからパワー全開で歌われていましたし。

石田：「今回この曲を歌います」と予告したら「えええええ!」と驚いていました。

松井：歌い終わったあとは万雷の拍手でした。子どもの感性はすごいですね。先生の歌が「自分たちのイメージどおりだった



あっても学びや理解があったと捉えます。
松井：先生が歌われたときの伴奏音源も、ご自身が弾いたものですね？

石田：はい。

松井：素晴らしいです。アクティブ・ラーニングとよくいわれますが、鑑賞でもこうしたアプローチができるんですね。

石田：細部にこだわろうとすると楽譜に戻らざるをえませんが、楽譜が読めない子もたくさんいます。この曲は音符を追えなくても言葉が手がかりになりますから、そちらでがんばらせようと思いました。

用途に応じた演奏を

松井：最後に鑑賞したジェシー・ノーマンの映像を生徒たちは食い入るように見ていました。それまでの学びがあってこそですね。

石田：演奏家によって印象が全然違いますから難しい選択です。声色の描き分けという意味ではフィッシャー=ディースカウが最適だと思いますので、「何人で歌っていると思う？」と問いかけるときは、彼の音源を聴かせています。でもフィッシャー=ディースカウは神がかり的すぎて作為を感じるので、ほんとうは指導書のCDにあるヘルマン・プライのほうがナチュラルで人間的な温かさがあって好きなんです。

松井：今日は2時間目の授業でしたが、1時間目はどのように進められたのでしょうか？

石田：最初は、私が教科書の日本語訳を淡々と読んで、文語調で難しいところを説明したり、文節を区切って分かりやすくしたりしました。

か、そうでなかったか」を、ストレートに「もっと弱いほうがよかった」とズバズバ言っていました。中3ぐらいだと遠慮してしまいますよね。

石田：「大変よかったと思います」みたいにね。考えをもって聴いてくれていたんだなと思いました。

松井：それから魔王のイメージで意見が2つに分かれたとき、先生はすかさず取り上げて「音楽にはいろいろな表現や感じ方があっていいんだよ」とお話しされていたのがさすがだと思いました。そのときうなずいている子もいたように思います。本質的なことを声高に言うのではなく、自然に1年生のこの時期に伝えられていました。2、3年生の授業でもこれが根底に流れているのでしょうか？

石田：義務教育が終わってしまうと、人に

よっては今後クラシックを聴く機会が全くないかもしれません。最後の出口のところはどういう教育を受けたかということについて、私の責任は重いと思うのです。その人が今後音楽を楽しみとして、自分のパートナーとして生きていけるか、あるいはこんなに素晴らしいものを知らずに一生過ごすかでは大きな差です。ぜひ音楽を好きになってほしいということに尽きますね。

松井：ところで先生、7クラス全てで歌われるのですよね？ クラスによって反応は違いますか？

石田：違います。とことんこだわる子もいます。「ちょっといいですか？ ここのところは僕はこうしたいんですけど」って(笑)。

松井：プロデューサー向きですね(笑)。

石田：こだわるということは自分の考えをもっているということですから、偏りが



松井：導入はいつも悩むところです。教科書を見ないでまず聴かせ、登場人物の数を当てたり、場面を想像したりする方法もありますよね。でも先生は最初から教科書を開いてストーリーを理解し、役柄をつかませるという手法なんですね。

石田：ざっとストーリーを伝えたと「えっ…強烈な詩…」「死んでたなんてショッキングです…!」と生徒は言います。逆に、そういうシーンにはどんな音楽が合うのかという興味のもち方もあると思います。

松井：なるほど! 3時間目はどのように展開するのですか?

石田：聴き比べがメインになります。

松井：鑑賞の授業の評価はいつも問題になりますが、先生は見取りとワークシートから評価されますか?

石田：はい。鑑賞の能力って難しいですよね。「文章力がない子=鑑賞能力がない子」とならないよう、ワークシートでは〔共通事項〕などのキーワードを使って文章を

書くよう促しますが…聴こうとする力は、そのときのその子の目の輝きかなと思っています。写真やビデオで判定したいぐらいです。

音楽は競わない

松井：3年生の最後の鑑賞では何を扱いますか?

石田：『Ave verum corpus』です。モーツァルトの作品のシンプルさや人間を肯定している温かさとともに、音楽は優しさや愛情だということを伝えたくて、この曲で締めくくります。

松井：人間の生きざまにつながるそうですね。

石田：本校は校内合唱コンクールに加え、全日本やNHKの合唱コンクール、吹奏楽コンクールにも参加しますが、中学校の音楽ではどちらかというと競うこと、優劣をつけることが多くなりがちです。でも、あの

クラスに負けたくなくてがんばったという思い出で終わってしまうのは不本意です。音楽は人の心を優しくしてくれるいちばんの薬だと思うので、みんなが優しくなって幸せになることが、音楽をするいちばんの意味だと思っています。



音楽科授業の “指導と教材” を再考する

進行 江田 司先生 (名古屋学院大学)

参加者 室屋尚子先生 (神戸市立なぎさ小学校)
西澤 譲先生 (台東区立東泉小学校)
平石孝太先生 (横浜国立大学教育人間
科学部附属横浜中学校)

限られた時数の中で、日々の授業内容を充実させることは、先生方にとってますますの関心事ではないでしょうか。そこで、今回のヴァンでは「教材」にあらためて着目して小学校・中学校の先生にお話を繰り広げていただきました。進行は、現在名古屋学院大学で教鞭をとられる江田 司先生。

——教科書の教材はなぜ短いのか？といった疑問や独自の教材研究法など、毎日の授業にかける情熱が伝わってくるような話題が満載です。



●● 初任の頃

江田：まず、先生方が初任の頃に教科書をどのように扱われていたかお聞かせください。

西澤：私は教員になって10年目になりますが、初任のときは教材のことよりも、まずは目の前の子どもとどう向き合うかに一生懸命で苦慮した記憶があります。教材研究や開発までは行き届かず、教科書に載っているとおり、朱刷り(指導書)を見て教えている感じでした。幸い、私と入れ替わりで退職された先生がサポートしてくださったので、相談しながら進めていきました。

平石：教員になって今年で14年目です。大学を出てから留学し、卒業後戻ってきてからはオーケストラでエキストラをしたり、スタジオの仕事をしたりしました。そのため最初に教科書を見たときには、若気の至りで、学習指導要領を軽視しました。音楽教育がどういうものかを理解していなかったのです。教えるべきことは教科書にありましたが、それをどう浸透させればいいのか、どこまで教えればいいのか迷っていました。

室屋：今は〔共通事項〕など「これを必ず教えなければならない」というものや、「こんな子どもたちに育ってほしい」という願いをもっていますが、初任の頃は「子どもたちが楽しく歌ってくれることがいちばんいいかな」と思っていました。専科なので3～6年生まで持ち上がりでしたが、系統性のことなど考えず、自分も子どもも興味のもてそうな教材を使ったり、テレビの曲やその頃のヒットソングを扱ったりしたこともありました。ところが、指導の難しい学校に転勤したとき、子どもたちに「できない。分からない。だから音楽は嫌い」と言われてしまいました。そこで教科書に準じて系統的に段階的に教えたところ、その子たちが「分かる、できる」ようになるのを実感しました。赴任したときは大荒れで、音楽の授業にならないこともありましたが、その子たちにとっては音楽のハードルが高かったのですね。でも低学年から積み上げていくことが大事だと分かってからは、教科書を使い系統的に進めることにこだわってきました。



●● 教科書の長所を活用する

江田：今日は歌唱と鑑賞の教材に内容を絞りますが、実際、教科書教材はどれぐらい使っていますか？

西澤：正直に言うと全てを扱っているわけではありません。例えば去年、研究授業で「せんりつのとくちょうをかんじとろう」という題材を扱った際、『あの雲のように』は使いませんでした。「せんりつのとくちょう」というときに、3年生では旋律の音の上がり下がり、つまり音高の変化を捉えようとしたとき、本校の実態を考えると「ゆるやかな音の上がり下がり」よりも、順次進行で目に見えて分かるものや跳躍進行のあるもののほうが、特徴を捉えやすいのではないかと思いました。児童の実態と、身に付けさせたい力から逆算して、教材を見直すようにしています。

江田：平石先生は附属校ということで、教材開発されることも多いのではありませんか？教科書の位置付けがどのようになっているのか、そのあたりをお聞かせください。

平石：まず本校の場合は研究テーマがありますから、そのルールに沿った指導をしなければなりません。



○えだ・つかさ
名古屋学院大学准教授

ん。また、教科の特性を考えると、ルールに乗れる分野と乗るのがやや難しい分野があります。そこをどのようにうまく調整するかが、苦勞するところです。教材についてですが、私の場合はほぼ教科書の教材を使っています。

江田：それはどうしてですか？

平石：教科書には指導事項に導く仕掛けがあるような気がするからです。最初から順々にやっていったら、最後には指導事項の全てを網羅しているというか、あまり私たちが意識しなくてもよいというか…(笑)。そういうふうにつくられていると思います。ただ、教科書を必ず開くかと言えば、開かないことも多くあります。それは教科書の内容を理解するのに、事前指導が必要な場合があるからです。例えば、『中学生の音楽1』の8～9ページには、声の出し方(My Voice!)が載っています。いきなりここを見せても子どもは自分のこととして捉えられません。それに「いい声」についてどのような定義があるのか、そういう声をどうやってつくるのかを子どもに自由に考えさせたら、聞いたこともないような発声法を編み出してしまいかもしれないので、いくつかのキーワードや実際の歌声を示して説明をする、そういう事前指導が必要だと思います。

江田：室屋先生はいかがですか？

室屋：神戸では秋に音楽会がありますので、9～11

月の初めまでの約2か月は音楽会に向けて授業を行います。それ以外はほとんど教科書を使います。音楽も算数も国語も「学習」なので、「九九が分かるようになる」と同じように、音楽でも「1年生ではこんなことができるようになりました」ということが必要だと思っています。例えば2年生の「はくの まとまりを かんじとろう」であれば、『はしの上で』『たぬきの たいこ』を歌ったり、動作を付けて踊ったりします。さらに『メヌエット』『トルコ行進曲』を聴きます。題材の中で、歌唱、体を動かす活動、鑑賞などを通して2拍子や3拍子の理解を最終目標にする…そういうことが教科書だととてもやりやすいんです。



●●教材の長さと子どもの集中力

江田：小・中学校で異なるとは思いますが、特に小学校では、一つの教材が長いと最終的な目標に達するには難しいのかもしれない。

室屋：鑑賞の場合、6年生でも5分以上の曲は無理ですね。5分の曲でもその中の1分半だけを何度も聴いたりします。長い曲だと、途中からBGMのようになってしまうこともあるのです。5分間なら集中して聴けるし、5、6年生だと少し分析的なことに注目して聴いたり、確かめたりすることもできます。

西澤：鑑賞で5分ももたないというのは、どこも同じなんですね。5分でさえ最初から最後まで集中して聴かせるには、かなりの手だてが必要になります。また、子どもの実態によって教材の切り口や授業の方法も変わるのだということを強く感じました。室屋先生が何度も聴かせるとおっしゃいましたが、私も鑑賞教材を扱うときは、いちばん聴かせたいところを何度も聴かせます。

江田：鑑賞教材を全部聴くのではなくて、いくつかの場面に区切って聴かせるのですよね？



○むろや・なおこ
神戸市立なぎさ小学校主幹教諭



西澤：そうです。どうすれば子どもが集中して音楽を聴き、曲や旋律に気持ちを向けられるかを考え、CDをパソコンに取り込んでトリミングし、聴きたい部分をすぐに再生できるようパワーポイントに埋め込んだものをつくっています。もちろんそのためには曲の分析が必要になりますが、聴かせたいところを何度も繰り返せる仕組みを利用しています。

江田：子どもは「先生止めないで、続けて全部聴かせて」と言いませんか？

西澤：その言葉を待っています。

江田：少し乱暴な言い方ですが、子どもが集中するかしないかは教材そのものではなく、教材の提示の仕方によるということですか？

西澤：僕はそれによって大きく変わると思います。

室屋：5年生の『いつでもあの海は』で、「同じ旋律を歌う部分、2つの旋律が追いかける部分、旋律が重なり合って一緒に動く部分」を勉強して、その後に『アイネ クライネ ナハトムジーク』で「同じ旋律を演奏する部分、伴奏をしている部分、追いかける部分」を学びました。『アイネ クライネ ナハトムジーク』だけでは、「弦楽合奏の響きを聴く」ぐらいしかできませんが、歌唱と一緒に扱うことでより分析的な視点をもてますし、そうやって聴くと曲がすてきに聴こえます。すぐに感じ取ることのできる子と、何度も聴いてやっと分かる子がいますから、繰り返し聴くというのは、とても大事なことだと思います。

子どもたちはこの曲を映像で見ればコンサートを聴きに行ったような気持ちで音楽に浸ることができるし、CDで聴けば分析的に聴き取りやすい。ですから、いろいろな方法で何回も聴くことのできる5分以内の曲で十分なのです(笑)。

西澤：作品が長いほど、その曲にはいろいろな要素が含まれますが、短ければ、学ばせたいことにフォーカスできます。そういう意味で短い時間の鑑賞曲に賛成ですし、教科書に載っているのはちょうどいいサイズだと思います。歌唱や器楽の場合、子どもたちに学ばせたり感じ取らせたりしたいものがあったとしても、歌唱や演奏ができるようになるまでに時間がかかってしまうこともあります。曲が長ければ時間もかかります。ほんとうは歌えるように、演奏できるようにってからがスタートなのに、それがゴールになってはならないと思います。

江田：中学校の鑑賞教材についてはいかがですか？

平石：私も教科書の鑑賞教材は長さもちょうどよく分かりやすい名曲だと思います。例えば「運命」は誰もが知っているし、動機の反復や変化も捉えやすい。またソナタ形式を教える際に扱いやすく、分かりやすい教材だと感じています。それに子どもの思考を育てることを考えると、私たちの楽曲分析と発問の工夫は大きな手だてですから、あまり長い曲でなくてもいいと思います。



●●教材を生かす指導の工夫

平石: それから私は「聴き慣れている曲かそうでないか」もポイントだと思っています。年間35回授業があるとして、その半分ぐらいは、3～4分程度の曲を鑑賞させます。よく使うのはパヴァロッティの歌う『帰れソレントへ』です。パヴァロッティが歌っている映像は、歌うときの表情から、口の開け方や声の響かせ方のイメージづくりにも生かします。3年生になって『帰れソレントへ』を歌うとき、すぐにできてしまうんです。いきなり「Vide'o mare quant'è bello! どうぞ」と言っても付いてこれるんですよ(笑)。楽譜の読めない子もありますが、風景として楽譜を眺めて同じ音型が何回も続いていることに気付けば、「反復」と分かります。鑑賞と歌唱を関連付けた授業を展開すれば、自然と〔共通事項〕も学習できます。日常に少しずつでも組み入れるのがポイントだと思います。

江田: なるほどね。教材と指導法はセットになって

いるということですね。

平石: はい。音楽との出会い方もそうです。まずは作品がどのような曲か、どれだけ素晴らしいかを示すために、紹介の仕方を工夫します。『浜辺の歌』であれば、本校は神奈川県にあるのでまず教科書の写真だけをアップにして見せます。僕は藤沢生まれなので、「ちょっと先生の話をしてもいい？ 先生が幼稚園のときにおばあちゃんとよくここを散歩したんだ」と切り出す。子どもたちは何を言われているか分からないから「はあ？」と聞いている。「この波をちょっと見てよ、授業と関係なくてもいいじゃない」と言いながら波について話したところで、BGMとしてこの曲の伴奏を弾きながら質問をして曲に入っていくなど、生徒たちが興味をもてるように曲の導入部分を工夫しています。

江田: 僕もそうです。僕の場合は、扱いづらい教材を逆手にとって指導に生かすことがありました。範唱CDで歌詞の聴き取りづらいものを何も見せずに聴かせると、子どもたちに「それがどうしたの？」という顔をします。「今のは何語？」「日本語」「じゃあ何て言ったのかな」。答えられるわけがありません、何を言っているのか聴き取れないのですから(笑)。「先生もう1回聴かせて」となって何回も聴いているうちに、何となく歌詞が分かってきて、黒板に歌詞が出来上がる。そうする間にみんな歌えるようになり、その曲が大好きになる。…ですから、確かに指導



法やもっていき方は関係しますが、教材のもっている魅力も大きいと思います。

西澤：『つるぎのまい』はすぐのってきますね。

江田：そうですね。この間大学生に聴かせたら、いつも居眠りしている学生が起きていて、講義の最後10分間はみんなが歌っていました。スポーツ系のお兄ちゃんたちがガタガタガタガタ…と言いながら(笑)。学習院大学に呼ばれて同じ授業をしました。『つるぎのまい』の映像を見せて「一晩で出来上がった作品だけれど、この映像からその答えを見つけてごらん」と投げかけました。「ヴァイオリンが同じ後打ちばかりしている。ずっと同じことをしているから×印でいけるし、メロディーも分かれて同じことをやっているだけで、最後のほうだけ和音になっている。あとは一緒」「最後は黒鍵の音だけで終わっている」など。見つけ出すまでには時間差があるから、何度も見ないといけない、聴かないといけない。そうする中で自分の中にその音楽が入っていきます。

平石：おっしゃるように教員のプレゼンテーションは絶対必要ですし、教材も魅力的でないとだめだと思います。江田先生、先ほどの扱いづらい曲についていかがえますか？

江田：この曲は…という感じがあったのは『越天楽今様』ですね。この曲を取り上げると反乱が起こる(笑)。だからこそ指導法を開発するのですが、僕たちは教科書の文字情報を見たら、分かったと錯覚する。例えば「春のやよいの あけぼのに よもの山辺を 見わたせば」の「よも(四方)」は、子どもの中にはない情報です。教科書を見せずに聴かせたときは、何度聴いても「よも」という言葉が聴き取れませんでした。『われは海の子』でも「とまや(苦屋)」という言葉が聴き取れませんでした。



○にしざわ・ゆずる
台東区立東泉小学校主任教諭

●●「なぜ？」から「思考」が育つ

江田：先ほど平石先生がおっしゃった「思考を育てる」というのは「なぜ?」「どうして?」「どうすれば?」とクエスチョンマークが付く投げかけですね。何度も聴かせるのは「なぜ?」を見つけるためですし、歌い方についても学んでいけば「なぜ?」「どうしてそうなるの?」「あれ? おもしろいな!」となっていくでしょう。

平石：はい。『帰れソレントへ』では、短調から長調へと変わる部分で、歌い手の声の音色の変化はどうなっているのだろうか? と考えてみます。伴奏が転調し、歌詞も「優しかった君はここにはいない」から「恋に陶醉したことを振り返る」内容に変わる…だから音色も変化する。それは『消えた八月』も同じです。短調の第1主題の「熱い光の中で」は、恐らく“僕が原爆で亡くなった”ところから始まるけれども、平行調の第2主題の「僕の好きな八月は」部分では、生きていたときの楽しかったお祭りのことを考えている…そういうふうにつなげていきたいのです。

西澤：「なぜ?」を考える授業といえば、先日5年生の『夕やけこやけ』の伴奏の和音による響きの違いを感じ取る活動でドキッとすることがありました。「シンプルな服を着ているモデルさんと、ドレスを着ているモデルさんがいます。それぞれに当てはまる伴奏はどちらでしょうか?」と投げかけ、メロディー



○ひらいし・こうた
横浜国立大学教育人間科学部附属横浜中学校教諭

をモデルさん、伴奏を着ている服として、どちらの伴奏だと思うかを答えさせました。僕としては、ドレスのほうがおしゃれな和音を使った伴奏だという答えを意図していたので、それを察して答える子もいたのですが、「なぜそう思うのか?」と尋ねたときに、ある子がバスの半音進行を聴き取ってこれを根拠として、「寂しい感じがするからシンプルな服のほうがだと思う」と言いました。おお、これはどうしたものか! と(笑)。意図とは違うけれど、その子なりに聴き取ったことを根拠としているのだからよしとすればいいのか…。根拠をもっているという点ではマルだと思うし…。どう評価したらいいのかな…。と。捉え方は子どもによって違いますよね。子どもどうして侃々諤々、^{かんかんがくがく}「僕はこういう感じがしたからこう言ったんだよ」と言い合っていました。この場合、両方とも評価すればよいのでしょうか?

江田: いいと思います。根拠をもって説明しているわけですからね。授業ではある程度のヴィジョン(未来を見通す力)が必要です。子どもたちの「ああだね、こうだね」が、思わぬところへいつてしまわないように「ここまではいける」という枠組みが必要です。もちろん今の話のように子どもは枠組みを超えてくるんだけど。

室屋: 子どもが考えたのだから「何でもOK」というのも、授業の場合どうかと思います。

江田: プログラムを組んで「こういうふう to 育てよ

う」というのは、現実問題無理じゃないですか。こういうふう to 育てていければ子どもたちはそれぞれなので、それに応じてデザインしながら近付けていくことになると思います。



●●とっておき私の教材研究法 ～全てが教材なのだ～

江田: 教材の研究法についてはいかがですか? きっかけになった曲はありますか?

平石: 『夢の世界を』です。1年生ではここまで、2年生ではここまでと決め、楽典や発声を踏まえた唱法の指導として中学3年間を通して発声練習で歌っています。まずは歌詞と旋律を覚え、つられない程度に元気よく歌うことから始めます。次に拍子や拍の流れを手拍子で感じ取り、プレスやフレーズ感、拍の流れにのった旋律の扱いに気を付けます。すると構成(形式、反復、変化、対照)にも関心をもつことができるようになり、子どもたちは音楽を大切に歌うようになるのです。さらに強弱、音価、リズムを取り上げながら、個の響きを豊かにしたり、音色の変化や声のスピードの変化を感じ取ったりします。こうすることで歌詞や旋律を追うだけでなく、音楽が体の中に入り、表現へとつながります。そして最後にアンサンブルとして、バランス、ハモらせ方、和声の響き、全体の響きを指導します。

室屋: 国語で詩の行間に何かがあるのかを考えるように、音楽でも楽譜の記号や指示のあるなし、歌詞との関係から何かないかとじーっと見てみると、作曲者の意図や思いに気づくことがあるんです。

江田: では先生は楽譜を見たときに「ここには何かあるはず」というふうに思っているのですか?

室屋: 同じメロディーなのに、前半にはスタッカートが付いていて、後半にはスタッカートがないのは「なぜ?」と考えます。特に教科書では、題材の学習内容や前後の教材との関連によることもあるからです。

西澤：私は副教材のようなものを自分で作っています。「音楽ノート」と名付けて、画用紙を半分に折って糊で貼り、ポートフォリオのように残るものです。それを作り始めてからは教材をもう一度考え直すようになりました。指導書を読み、教材研究をする中で「これを教えたい」「次に回していい」「ここで教えないといけない」が自分の中で整理されるようになりました。簡単なものでいいのでオリジナルで作るのも手だと思います。もう一つよかったのは、手元に残るので「ほら、あのときの」と言ったときに、同じ学年であればすぐに「あれか」と振り返ることができる点です。自分でフォーカスしたところが一目で分かるので、それを見取って評価にも使います。僕の力不足もありますが、授業の流れの中で見取れる部分は限られているし、音楽は消えものだから、子どもにとっても、評価する教員にとっても残るものがあるのはいいと思います。子どもも入れ替わるので「音楽ノート」は子どもの実態に合わせて毎年見直すようにしています。

江田：学会発表用の調査(2014)で、子どもが習った

6年間の歌唱共通教材を覚えているか、小学6年生にアンケートをとったところ2つ覚えていない教材がありました。他は平均90%は覚えていたのに、18%と21%だったのが『ひのまる』と『まきばの朝』です。『まきばの朝』は他の専科の担当だったときなので教えたかどうかを聞いたら「教えた」と。僕も『ひのまる』はきちんと教えた。でも教え方を振り返ってみると、1時間だけ、工夫せずにさらっと扱っていた。そうしたらみごとに記憶に残らなかった。『まきばの朝』は歌詞を読んで情景を思い浮かべるという授業だったようですが、これもみごとに忘れている。ですから、教材の魅力は指導法の魅力しだいとも言えるかもしれませんね。先生の話もCDもひっくりめて、全てが教材なのだと思います。



風の音

エッセイ

前田美子

Maeda
Yoshiko

「ネエ、この棒いるのかなー」

校長室(控え室)が苦手な私は、この日も掃除の時間を体育館の涼しそうな入り口近くに腰かけボンヤリと時間を過していた。

突然人気のない入り口に可愛い影がチラッと植木の支柱を手立に立っていた。

「えっ? どうした?」

「ザリガニ取りたいけど……この棒半分にしてもいい?」

「どこにザリガニがいるの……」

「その所、来て来て」

そう言えば、さっき小さい影が見え隠れしてたのは、この子だったのか。掃除をしている子かなと思ってたのに「ザリガニ」か。

「ホラ、でかいのおるやろ!」

「小さいのもおるネエ!」

「一緒に取ろうよ!」

「えっ! そうか一緒にね」

溝に片足ずつ足をかけ、この棒で試してみても、つるりとすべる。

「難しいな、もう1本棒があると楽かも」

「これ半分にしようか」

さすが智恵がある。半分にしたら植木の支柱にならないかもと、ちょっと気になるが。

「待ってて」

あっという間に、斜めに石に立てかけ、足でポッキリと2本にして渡してくれる。

「大きいのがいい、つかまえたら、こっちに置いてね。広いところ」

そっと挟んでドロ水から上げる。やれやれ。

「大きいね」と言う嬉しそうに

「ン!!」と。ザリガニと遊びはじめる。

体育館にもどり、私は再びボンヤリとした時間に入る。

ふと、あの子どうしたかなと外を覗くと、さっきの場所でカンカン照りの中、ザリガニと遊んでいる。

「影で遊びなよ。ザリガニも君も、頭痛くなるよ」と声をかける。

しばらくして今度はザリガニ坊やが体育館に、そっと静かに入って来て、小さい声で「ちょっと来て、急いで」と口に指を立てて「シーッ」と合図する。ぐいぐいと洋服を引っばって小高い木の生い茂った所まで来て、桜の木の上を指して

「あれ取りたいから、おんぶしてくれる?」

「私がおんぶしても余り役に立たないよ」と背負いながら言うと

「シーッ、つま立ちして!!」

「肩車に乗るかい?」

もう、こうなったら蟬を取るしかない。と私のやる気スイッチが入る。肩車に乗せると、

「もう少し大きくなって!!」

「えっ?」

「肩に足で立ってもいい? もう少しだから」

まえだ・よしこ

長崎県出身。東京都葛飾区立南奥戸小学校を振り出しに、板橋区、青梅市、武蔵野市の小学校で、授業や課外活動を通じ、一貫して子どもと真っ直ぐに向き合い、子どもたちの歌う心をやさしく育ててきた。

元東京女子体育大学／短期大学講師。むさしのジュニア合唱団「風」指揮者。全日本合唱教育研究会理事。

著書に『子どもと歩く』『レパートリーを広げる小学生の合唱(CD付楽譜集)』(音楽之友社)、『卒業式のうた1』『卒業式のうた2』『卒業式のうた3』(共編:教育芸術社)などがある。

「いいよ、木につかまりなよ!!」

小さい運動靴が肩に乗る。

「手を離さないで!!」

頭上でミンミンミーンと蝉の鳴き声。

ついに私の頭の上に片足をかけ、つかまえた。

「取れた!!」

嬉しそうな弾んだ声。

「いいかい、蝉を、ちゃんと持って木に沿って、ゆっくりゆっくり降りて! 慌てないで」

私の腕の中にミンミン鳴く蝉と1年生の名札をつけたザリガニ君が、すっと入って来た時、力が抜けた。怪我させなくて良かったと。

そんな心配はどこかに

「やった蝉だ!!」

と後も見ずにとんで行った。

ふと見ると、さっきの日向にザリガニが、甲羅干し状態。そっとつまんでドブにもどしてやる。

ここは鳥取、倉吉。午後から5・6年生の授業だ。今日の昼休みは、生き物大好き1年生君に会えて楽しかった。ザリガニ君ありがとう。

東京を離れると、子どもが、ドンドンたくましくなる。いつも、それを感じて、自分の心が洗われていく心地がする。

沖縄宮古島の子ども達、じっくりこんがり焼かれた肌と澄んだ瞳で、私の眼をのぞき込むようにして、「学校の神様が通る道だからいつも皆で、きれいに掃除するの。先生、そこに立っていると神様が通られるのにじゃまだよ」

「宮古島の子等は、神様を大人をどの子も信じている!!」

と、自慢気に話される校長先生。そんな「大人」になりたいな。

島根県大田市にある小規模校。「今年は1年生から6年生迄居ます」と話をされていたが、全校16名、木造校舎、映画の中に出てくる様な小さな可愛い学校。隣接する保育園から、ずっと卒業する迄一緒。渡り廊下には、16本のシャベルとジョロがきちんと並び、村の人々は、人数が減っても統合はしないと、学校を大切にする。どの子どもどの子も村の人から、いつでも声が、かけられるとか。私が行った日、音楽集会の場で、並んで歌っている1年生がくしゃみをしたら、6年生がチリ紙で鼻を、手を添えて拭いてやった。その上、そのチリ紙を自分のポケットに入れている姿が余りにも自然で、「育つ」とは、と。

偶然に立ち寄ったこの学校が大好きになり、私も村の人の気持ちで、時間を作っては楽譜やCDを御土産に、心の洗濯をしてもらいに尋ねているのです。

子どもらしい子ども・・・大好き。



音楽を 「ことば」にする

吉田純子

〔最終回〕 音楽と歩み、伝える喜び

聞き手：市川かおり（株式会社教育芸術社 代表取締役社長）

朝日新聞編集委員、吉田純子さんにお話を伺う最終回。

これまでには音楽と言葉の近似性について、音楽が社会や教育とどうかかわっているのか、といった内容をお伝えしてきました。集大成ともなる今回は音楽とは人間そのものである、といった視点からの熱いお話が展開されます。

「音楽をことばにする」という思いが読者の皆様に届くことを願っています。



イラストレーション：ソリマチアキラ

アカデミズムをどう捉えるか

市川：吉田さんは大学時代、コレペティ¹などの演奏活動をされていたイメージがあったので、新聞社に入社されたときには驚きました。

吉田：大学院の頃には書く仕事を始めていましたが、当時はピアノの仕事も多く、その中で「こんなにおもしろいことを学者だけが独占しているんだ」と強く思いました。

市川：分かります。

吉田：例えばバイエルです。日本と西洋とが出会う歴史的な偶然が重なって、バイエルを精神修行のように思う今の日本人の接し方があります。でもバイエルができないからといって、その子は落ちこぼれではない。だいたいみんなここで心が折れるけれど、ブルクミュラーに救われてもう一度戻ってくる（笑）。2人は同じ年に生まれて、ブルクミュラーはフランスへ行って瀟洒な作風^{しょうしや}を身に付け、一方のバイエルはガチガチのドイツ人。当たり前のおもしろい歴史につながっていること、バイエルがで

きなくても落ち込む必要はないことなど、さまざまなものが見えてきます。それは一般の方々に分かる言葉で伝わっていないのではないかと思います。

市川：なるほど。

吉田：バッハの真贋^{しんがん}についてもそうです。バッハの作品の多くは弟子や別人によるものですが、当時は誰がつくろうがあまり関係なかった。モーツァルトも他人の作品を引用していましたし、それは悪意があるわけでも、弊害が生じるようなことでもありませんでした。深く勉強すると価値観は変わってきます。これを学者だけに留めるのはとてももったいない。ライターとして、プログラム1つを書くときも、少しでも伝わるようにしようと意識してきました。

*

吉田：テレビや新聞のような大きなメディアでも、クラシックのような重みのあるジャンルを敬う文化が衰退しつつあるという実感は、確かにありますね。

市川：それは軽視という意味ですか？

吉田：そこまでは言いたくないですが、「こういうニッチな記事は、一部のファンにしか読まれないだ



○よしだ・じゅんこ

1971年、和歌山市生まれ。1993年、東京芸術大学音楽学部楽理科卒業、1996年、同大学院音楽研究科(西洋音楽史)修了。1997年、朝日新聞社入社。仙台支局(警察、市政担当)、東京本社学芸部(家庭面)、整理部(地方版)、文化部(音楽担当)、広告局広告第4部(金融担当)を経て、編集委員(音楽担当)。

ろう」という見方をされてしまうことは残念ながらあります。私としては、少しでもクラシックの世界の奥深さに触れてもらうためのフックになれば、と願って記事を書き続けるほかないのですが。ネットと新聞ではおのずと求められる情報がきっと違う。全てが軽いエンターテインメントに走らなくてもいいのではないのでしょうか。そうではないものを読みたくて新聞を買う人もいると思うので。

市川：そうですね。

吉田：夕刊で連載している「音を継ぐ」のテーマはアカデミズムをどう捉えるかということです。山本直純さんも岩城宏之さんも三善 晃さんも伊福部 昭さんも朝比奈 隆さんも、日本のアカデミズムが排他的であることを嫌っていた。直純さんは斎藤秀雄さんや小澤征爾さんが一目置くほどの才能に恵まれていましたが、彼はクラシックの外の世界に飛び出して一般の人々を導くことに奔走したし、小澤さんもその思いを理解し、本物の音楽を届けることに全身全霊を傾けました。岩城さんは晩年にベートーヴェンの交響曲の全曲演奏を始めましたが、普通の指揮者はそんなことはしない。真面目そうなクラシックの世界にも、おかしなことに人生を賭ける人

がいるもんだという風に関心をもってもらったっていいだろう、と。もちろん、純粋な好奇心に裏付けられたちゃめっ気には違いないのですが。彼らはアカデミズムの中にクラシックがとどまることへのいらだちを活動に変えてきた人々なんです。三善さんはフランスに行ったときにジャポニズムと言われたのが嫌で、アカデミズムへの反発を覚えた。彼がいつもバイブルにしていたのは、伊福部さんの『管絃楽法』です。伊福部さんはご存じのとおり独学中の独学ですよ。朝比奈さんも多くの部分が独学ですから、子どものオーケストラとかオペラとかの領域にこだわらず全部にかかわっていくことができた。

そうすると「本物の音楽」はあるのかという話になります。若手指揮者の山田和樹さんが、「本物の音楽なんてない」とインタビューで語ったことがありました。本物の音楽があるという幻想によって、音楽業界はつまらないものになっているということです。特に芸大などで学んでいると、本物の音楽があると思いがちです。私の中ではバッハやモーツァルトは神様ですから、それは本物と呼ばざるを得ない。私にとっての本物が万人にとっての本物とは限りませんが、「本物」と思えるものに出会う人が増えたら嬉しいなと思います。いろいろな人がさまざまなことを感じるのが大事であって、自分が書いたものがそのきっかけになれば…。

市川：きっかけの提供ですね。

吉田：単に素材を投げるだけでは相手も食べてくれないので、それは日々修行です。

市川：提供する側に、人としての魅力や深みがなければできないことでしょうね。

吉田：ですから、人と一緒に時間を過ごすのは大切だと思います。人と会い、話をして精神を耕す。同じ経験をして、同じものを聴いても、感じる人と感じない人がいる。自分が感じる人になってさえいれば、人に会えば会うほど自分の糧になっていく。私はピアノも作曲も、学者としても究めてはいませんが、その都度学ぶ自分でいればいいと思っています。何か自分の五感を動かす新しいものに会ったときに、それをどのように次のエネルギーにできるか。音楽にはいちばんその力があると思います。多くの人が合唱やオーケストラ、吹奏楽などを経験していますし、クラシックなんて興味ないと言う人で

も、CMや街中、喫茶店などで必ず音楽がかかっているの、耳にしない日はほぼないでしょう。音楽は環境や空気のように存在していて、なおかつ人をつなぐことも思考を深めることもできる存在なのだと実感しています。

＊

市川：10年後、人と音楽とのかかわり方はどうなっていると思いますか？例えばアメリカでは大手CDショップが姿を消し、音楽は配信されるものになりつつあります。演奏会というかわり方も変わってしまうのでしょうか？

吉田：ハード的なものや、社会の中で旧態依然としたクラシックがどう生き残っていくかということですね。近頃はハイレゾ²などいろいろあります。おもしろいと思うのは、LP返りがみられることです。人間は楽なほう、軽いほうに流れていくので、LPレコードにツールが戻ることはまずないはずですが。ただやはり人間は、管理されたり自分たちの感性が脅かされたりしたときに、モゾモゾとするものなんです。きっと何か気持ち悪いと思ってLPや生音に返りたくなるところがあるのだと思います。CDなどのパッケージメディアは、最終的にインターネットへ行き着いてしまうかもしれませんが、分かりやすい方向に進むときに危機感をもったり、手触りを大切にしたりすることが人間が人間であるゆえんではないでしょうか。

市川：手触り…ですか。

吉田：生演奏を聴くというのは今の時代しんどいものです。忙しい日々の中で仕事を終えて19時までに演奏会場に足を運ぶのは——私は仕事で行きますけど——大変なことだと思います。でも隣に人がいて、雑音も含めて毎回違うものを聴くという空気感に対



して意識的になっている人は、人間としての生きる手触りを既に見つけてしまっているんですよね。それはものすごく人間的なことです。ポップスや映画のように完璧にハイテクでつくられる現代において、感性の反逆のようなものがあると思うのです。その例がハイレゾやLP返りだと思います。例えば化学調味料だらけのものを食べ過ぎて舌がまひすると、何を食べてもおいしく感じてしまいます。そうになってしまう前に、少しでもいいからしんどい思いをしてでも演奏会に行ったり、生のものに触れることができる場所に行ってほしいですね。事情があつて外に行くことができない人は、CDやラジオで聴けばいいんです。手触りはどこかにあります。

メディアや音楽を聴く環境は大きく変化していますから、今後10年が勝負だと思います。ただ人間の本質は急に大きく変わるものではありません。人間の肌感覚や手触りを少しでも伝えることで、10年後もその先も違ってくるのではないのでしょうか。10年後20年後は、どう変わっているかではなく、音楽に携わる私たちがどう変えていくのかを考えなければならぬと思います。

感動とは、到底言葉にできないこと

市川：教育や音楽をビジネスとする難しさを感じることはありませんか？

吉田：仕事であるということは対価をいただくわけですから、ビジネスであることを卑下する必要はありませんが…音楽の現場にいればそれを超える志がなければ、この仕事をする意味はないと思います。もっともわかるものは他にあるのですから。我々だってそうでなければこんなにしんどい仕事はしないですよ。かける時間や体力、労力を考えると割に合わないと思うこともあります。でもそれを超えるものがあるからがんばれる。伝えるという



〇いちかわ・かおり

より、共感、協和につながるのかもしれませんが、自分がつながる方々にきちんと伝えたい。そしてそういう世界で生きている自分を確かめるとしたら、お金以外の対価も必要です。体はきついけれど、音楽を聴いたり話したりすることで元気になることってありますよね。

市川：救われるというか…人間はそういう精神的な部分で生きているのではないのでしょうか。

吉田：それしかないと思います。それがないと人生って何なのかと考えてしまいます。

市川：そういう意味では、私たちは幸せですね。

＊

市川：吉田さんが個人的に感動なさることは、調和や共感、協和の強さによるのでしょうか。

吉田：そうですね。感動とは、わけが分からないことです。ほんとうに心が動く感動という気持ちに理由はないのです。音楽に打たれるとき、その感動は自分だけのものです。でも隣で同じように感動して涙を流している人がいたら、そこでつながるものがあるかもしれない。それは表面的な連帯ではなく、ほんとうに自分が物事に感動することが前提です。そのためには何かを感じるということをまず教育しなければいけない。子どもたちに「これはたいへん感動的なものです」といってモーツァルトを与えてはいけません。もちろん感動してほしいから聴かせるのですが(笑)。私は教科書に載っていたモーツァルトの『クラリネット五重奏曲』を教室で聴いてとても感動しました。「なんだこれは！こんなに美しいものがあるのか」と、雷に打たれたような気持ちでした。感動を強いてはいけませんが、感動するだろうものをいくつも子どもに出会わせてあげることによって、扉は開きます。

市川：(力強くうなづく)

吉田：素朴に、つながることの幸福が分かれば人はいくらでも調和します。幸福な経験が多ければ多いほど信頼につながり、その幸福な経験、つまり世界と自然との調和を実感したときに、人は自分を誇れるようになります。自分は調和したということが自信にもなり、それが何か一つのことを信じる力にもなる。そういうことからいえば、音楽は12音でも何でも調和するんですよ。

市川：調和しない音楽はまずありませんよね。



吉田：調和する幸福を多く刻めば、何かのときに調和しようと思うようになり、それがコミュニケーションや出会いのいちばんの原点になると思うのです。「音楽教育」というけれど、音楽そのものが人間であり、教育とあえていう必要もないぐらい人間をつくるものです。それは自明で、シンプルなことです。

市川：「芸術は特別ですごいものなんだ」と言うのではなくて、体の営みに共鳴して作用するものだと気付くことが大事かもしれない。人間というのはそもそも感じるものなのですね。

吉田：そうです。だからいい演奏会へ行って「よかったね」と言いながらお酒を飲むといい。こうして人生が楽しくなっていくのだと思います。コンクールも同じで、全国大会で歌った経験や、何か分からないけど感動したことは言葉にできないからこそ尊い。感動を言葉で言えてしまったら感動ではないというか…「何か分からないけどすごい！」とぶるぶるしちゃうのが感動で、それこそが宝物であり、その振幅が大きければ大きいほど、人間は自分の力が及ばない世界があることに気付いて謙虚になり、もっとそういうことに会いたいと思って趣味も増える。そういうレベルの高い感動を味わえるのは、伝統的なバックグラウンドをもっているものである場合が多いのではないのでしょうか。もちろんポップスにも素晴らしいものはありますし、ジャンルで物事を区切るのは嫌いですが、ただ現代音楽を含めてクラシックにはまだまだそういう種がたくさんあると思っています。人間はわけの分からない宇宙のようなものであって、感動が深ければ深いほど、その中へ向かっていくほうが人生幸せ！と思うのです。感動はそういう気付きをいっぱいくれるはずですよ。

(平成27年10月27日 朝日新聞本社にて)

学校音楽とアウトリーチ

第7回 アウトリーチによる被災地復興支援(熊本)

佐野 靖 (東京藝術大学教授)



今回は、7月20日(水)～22日(金)に実施された、熊本地震による被災地への音楽復興支援について報告します。

被災地の思い

「この復興途上の、いやまだまだ手つかずの被災地の状況をぜひ見てほしい」。

熊本空港に降り立った途端、出迎えてくれた現地スタッフにこう切り出されました。私たちとしては、すぐにでもコンサート会場に急ぎたかったのですが、車が益城町の中心部に近づく頃には、この言葉の意味がひしひしと実感として伝わってきました。被災地の現実を忘れないでほしいという切なる願い、時間の経過とともにみんなの記憶から忘れ去られてしまうことへの危機感から発せられた言葉だったのです。

地震から3ヶ月以上経った今でも、テレビや新聞等で見た悲惨な光景がそのまま残っている一帯を目の当たりにすると、言

葉を失ってしまいます。また、復興が進むにつれて地域ごと、あるいは軒ごとの被災格差も顕在化し、学校では子ども一人一人の置かれた環境の格差に十分なケアが求められているのです。

「くまもと音楽復興支援100人委員会」

「熊本地震」から2ヶ月を経過した6月の後半、熊本市立東町中学校の上野正直教頭から連絡をいただき、「くまもと音楽復興支援100人委員会」のことを知りました。東日本大震災も含めた被災地支援の一環として、大学、そして音楽学部として熊本への復興支援を本格的にスタートしようとしていた矢先のことでした。まずは若手演奏家を少人数で派遣しようということになり、すぐさま熊本県出身で邦楽科卒業の山下靖喬君に話を持ち掛けました。すでに5月にボランティアで演奏による復興支援を経験している彼から「ぜひやらせてほしい」との即答をもらい、急きょ実現の運びとなりました。

山下靖喬君は、本連載でも紹介したことがある津軽三味線日本一の奏者で、アウトリーチ活動にも積極的に参加してくれています。演奏はもちろん、そのトークの巧みさ、聴衆との即興的な対応力はすでに折り紙付きのアーティストです。

「音楽・芸術の力で熊本を元気に」をスローガンとするこの委員会は、全国からの音楽支援の窓口になろうと、教師やアーティスト、音楽愛好家、会社経営者など様々な立場の人々によって立ち上げられ

た有志の会で、「演奏(活動)支援」「ケアコンサート」の推進」「楽器・施設支援」を柱に活動を展開しています。すでに多くの演奏家がこの委員会を通して音楽復興支援を実施しております。今回のアウトリーチでは、委員会の中での「音楽吹き出しチーム」のスタッフが実施場所の案内等を担当してくれました。

子どもたちや地域の人々に私たちが癒やされ、元気づけられる

山下君が、今回津軽三味線による出前コンサートを実施したのは、20日が特別養護老人ホームいこいの里(益城町)と避難所にもなっている秋津公民館(熊本市東区)、21日が熊本市立の豊田小学校と桜木中学校、22日が有料老人ホーム「合同会社 ふくろうの森」(益城町)です。筆者は、20日の2ヶ所と21日午前の豊田小学校に同行しましたが、いずれの会場でも、一瞬にして聴いている人々の心をつかんでしまう三味線の音色、エネルギッシュで力強い奏法、場を明るく楽しく盛り上げ、エキサイトさせる独自のトークとかかわりによって、とても熱気と活気にあふれるコンサートとなりました。

演奏に真剣に聴き入る子どもたちの表情、屈託のないその笑い声、山下君を囲んで満面の笑みを浮かべる高齢者の方々、演奏中もずっと一人で下を向きつつ、そっと涙をぬぐっていたご老人……。豊田小の児童代表が、「山下さんの力強い三味線を聴けて本当によかったです。楽しいトークでこんなにも笑うことができました。地



震を乗り越える力をもらいました」と、今の素直な気持ちを語ってくれましたが、むしろ癒やされ、元気づけられたのは、演奏家や私たちスタッフの方だったのではないのでしょうか。

終了後、山下君からは、「音楽が生きる力に直結していることを実感できました」とのコメントが寄せられました。

8月末には、上野耕平(アドルフ・サックス国際コンクール第2位)率いるサックスカルテットが、やはり同じ委員会を通して熊本でコンサートと吹奏楽の指導を行う予定です。

このような貴重な機会を提供していただいた上野正直先生、坂本一生先生(熊本市立東町中学校)をはじめとする「くまもと音楽復興支援100人委員会」の皆様、あらためて深く感謝申し上げます。

I n f o r m a t i o n

2016年秋以降に予定されている主な研究大会やイベントをご紹介します。

研 究 大 会

10月 October

●27日(木)・28日(金)

鹿児島県
会場 吉野幼稚園、鹿児島市立大龍小学校、
鹿児島市立吉野小学校、鹿児島市立鴨池小学校、
かこしま県民交流センター、
鹿児島県立鹿児島南高等学校、
鹿児島県立鹿児島南学校

第57回 九州音楽教育研究大会 鹿児島大会

大会主題 見つめよう かかわろう そしてつくる

問い合わせ先 大会事務局長
鹿児島県立武岡台高等学校 飯山香樹
〒890-0022 鹿児島県鹿児島市小野町3175番地
TEL 099-281-5233 / FAX 099-281-5244
http://kg-onkkyoren.jindo.com/

●28日(金)

岩手県
会場 盛岡地域交流センター(ワリオス)、
いわて県民情報交流センター(フイアー)

第64回 東北音楽教育研究大会 岩手大会 第57回 岩手県音楽教育研究大会 盛岡・岩手・紫波大会

大会主題 心に音楽のよここびを

～感性を高め、思考・判断し、
表現する確かな学びのある授業の創造～

問い合わせ先 大会事務局長
滝沢市立龍崎小学校 副校長 舞田一穂
〒020-0652 岩手県滝沢市龍崎町87-1
TEL 019-687-2004 / FAX 019-687-5096
http://wasaki80wstc.com/touhokukenken

11月 November

●1日(火)・2日(水)

北海道
会場 函館市民会館、北海道函館西高等学校、
函館市立亀田中学校、函館市立金堀小学校

平成28年度 全日本音楽教育研究会全国大会 函館・道南大会 第58回 北海道音楽教育研究大会 函館・道南大会 第44回 道南音楽教育研究大会 函館大会

大会主題 ひびきあい つながり・ひろがる

音楽のメッセージ
問い合わせ先 函館・道南大会事務局長
函館市立瀬尻中学校内 笠島美敦
〒040-0044 北海道函館市青柳町10番7号
TEL 0138-23-4295 / FAX 0138-23-4296
E-mail kasajima-y@hakodate-hk.ed.jp

●11日(金)

埼玉県
会場 所沢市立北小学校、所沢市立並木小学校、
所沢市立中央中学校、
所沢市生涯学習推進センター、
所沢市民文化センター・ミューズ

第58回 関東音楽教育研究会 埼玉大会

大会主題 『伝わる音楽』

～音楽を共有し、
感性を豊かにする学びを通して

問い合わせ先 第58回関東音楽教育研究会埼玉大会 事務局
埼玉大学教育学部附属中学校 佐藤太一
〒336-0021 埼玉県さいたま市南区別所4-2-5
TEL 048-862-2214 / FAX 048-865-6484

●11日(金)

滋賀県
会場 大津市立平野幼稚園、大津市立平野小学校、
大津市立志津小学校、栗東市立大宝東小学校(栗東市立大宝西小学校)、
守山市立志津小学校、守山市立守山北中学校、
草津市立草津クレパホール(草津市立高崎中学校)、
滋賀県立守山高等学校、栗東芸術文化会館さくら

第58回 近畿音楽教育研究大会 滋賀大会

大会主題 学びのある音楽学習の追求

問い合わせ先 第58回近畿音楽教育研究大会滋賀大会 事務局
東近江市立真作小学校 教頭 久木佐登留
〒527-0091 滋賀県東近江市小園町377番地
TEL 0748-20-3100 / FAX 0748-20-3102

●11日(金)

鳥取県
会場 倉吉愛児園、
認定こども園鳥取短期大学附属こども園、
倉吉市立河北小学校、倉吉未来中心、
倉吉交流プラザ

第47回 中国・四国音楽教育研究大会 鳥取大会 第32回 鳥取県小学校音楽教育研究大会 第43回 鳥取県中学校音楽教育研究大会

大会主題 音楽っていいな！

～つつなからう 思いをこめて～

問い合わせ先 鳥取大会事務局
琴浦町立聖徳小学校 校長 森田徳雄
〒689-2355 鳥取県東伯郡琴浦町お529番地
TEL 0858-52-3016 / FAX 0858-49-5020
E-mail seigo-e@mailk.torkyo.ed.jp

一新作の場面による公開講座

Spring Seminar 2017

コンクール自由曲向けの新曲発表会「Spring Seminar 2017」を開催いたします。
同声・女声・混声の各2曲(全6曲)を合唱団、
司会者、作曲家と学びます。

セミナー終了後「小学校の部」「中学校の部」
「高等学校の部」に分かれて、Nコン課題曲の
ワンポイントレクチャーも行います。

●日時：2017年3月28日(火)
会場：横浜みなとみらいホール
小ホール

●司会：藤原規生
出演者：[同声] 佐井孝彰、三宅悠太
[女声] 大田桜子、木下桜子
[混声] 相澤直人、横山潤子
合唱団：八千代少女合唱団
(指揮：長岡利香子)

女声合唱団 ゆめの在詠
(指揮：相澤直人)
harmonia ensemble
(指揮：福永一博)

●お問い合わせ：
教育芸術社
スプリングセミナー実行委員会
TEL 03-3957-1168
FAX 03-3957-1740
http://www.kyogei.co.jp/

